

地域再生とまちづくり

各都市が目指すものは

<第48回>

最盛期は人口21万人

小樽市は、札幌市の西部に接し、早くから港湾・鉄道が整備され日本でも有数の商港を擁する商工都市として発展したが、戦後は経済的優位性が弱まり衰退傾向で推移している。現在の市域は東西約36キロ、南北約20キロ、総面積は約243平方キロメートルである。

人口は最盛期の1964年は約21万人だったが、94年には約15万人台、01年に14万人台、07年に13万人台まで減少し、近年では1年に約2千人ずつ減少している。特に若年層が札幌市などへ流出し、少子高齢化が加速度的に進行している。17年3月末現在の住民基

本台帳では12万37人となっている。

人口減少・少子高齢化が進行する中、小樽市では観光を軸とした地場産業の振興によってにぎわいを取り戻し、雇用創出を実現する「にぎわい再生プロジェクト」や、交通・住環境



「ジェクト」や、交通・住環境・雇用・レジャーなどバランスの良い暮らしを実現する「あずましい暮らしプロジェクト」などを総合戦略に盛り込んだ取り組みを始めてい

北海道小樽市・「にぎわい再生」などを推進中

る。なお、「あずましい」とは心地よい、住みよいという意味で元々は津軽弁のよう

サ高住と総合病院

②中心市街地 旧丸井今井小樽店と小樽グランドホテル跡地に15年、サービス付き高齢者向け住宅「ウイステリア小樽稲穂」と総合病院「小樽掖済会（えきさいかい）病院」が完成した。サ高住は地上9階地下1階、全81戸で2階は一般市民も利用できるレスト

ランも併設されている。総合病院は地上7階地下1階で全138床。市内の旧病院からの移転である。

①観光資源の活用 かつては「北のウール街」といわれた小樽だけに、往年の活気を伝える銀行社屋などの歴史的遺構が数多く残っている。家具量販店のニトリホールディングスが運営する小樽芸

術村は旧荒田商会、旧高橋倉庫を取得。これを改装し16年7

月、旧三井銀行小樽支店や旧拓銀小樽支店も取得し、今年7月に美術館として開業する予定だ。今後、このエリアは歴史的遺構を活用した文

化的観光スポットとして生まれる。なお、「あずましい」とは心地よい、住みよいという意味で元々は津軽弁のよう

る。なお、「あずましい」とは心地よい、住みよいという意味で元々は津軽弁のよう

ここで注目すべき点は、医療福祉施設を中心市街活性化に活用しようとする点だ。

④ニトリが取得した旧拓銀小樽支店 ⑤小樽掖済会病院とサンモール一番街の入り口付近



両施設に隣接して「サンモール一番街」がある。全長約170メートルのアーケード商店街であり、80年後半まで市内でも人通りの多い商店街だったが、郊外に大型店舗が進出して徐々に衰退。人通りもまばらな状態にあった。

今後、サ高住の住民や病院職員や見舞客が「サンモール一番街」に向かう人の流れができれば、新たなにぎわいを生むことが期待される。コンパクトシティの観点からも成果が期待されている。

（日本不動産研究所北海道支社、不動産鑑定士・稲葉勝巳）

本シリーズは今回で終了します。次回から新シリーズ「全国市街地の変遷」昭和の記憶から次代へを掲載します。（編集部）



旧荒田商会の建物を活用したアーノニューヴォーグラス館



旧高橋倉庫の建物を活用して出来たスタンドグラス美術館

歴史遺構を観光資源に

医療福祉施設で人の流れ変える